

九州の漆器工芸

—福島と川辺の仏壇の場合—

内 田 秀 雄*

On the Lacqueredware Industry in Kyushu

Hideo UCHIDA

(1976年9月30日受理)

1. はじめに

仏壇工芸がわが国の代表的伝統工芸である漆芸の最も総合的なものであること、またその特産地の形成されていることもしばしば論述したことであるが¹⁾、ここでは九州の場合について報告する。北九州の八女（福島）と南九州の川辺とである。

福島は仏壇とこれの関連産業である仏壇の障子に必要であった手すき和紙（今は機械化）、漆工を多く必要とする福島提灯などが総製造事業所430のうち45%（昭44）を占めている²⁾。この意味で福島は仏壇のまちといえる。

川辺は薩摩半島の中程の山中にひっそり潜んでいるような人口2万あまりの小さな町³⁾であるが、仏壇年商数十億円といわれ、鹿児島県第1の大島紬に次ぐ工業出荷額を誇り、京都もたじろぐ全く独自の伝統工芸のまちである。

2. その背景

およそ産業興隆の第1義はその需要があることである。われわれの現地調査の場合その立地要因をたずねて、返ってくる文言はつねに至って単純、もうかるからである。仏壇なるものの本来の意義を保っているのは真宗のみである。仏壇という聖所があって始めて家をなすと考える。したがって、ここではその要求は極めて強い。他の諸派では先祖の位牌のおき所になり下っている。そこで真宗の盛行地域にその特産地が形成されるのである。京都、大阪、東京に始って、山形、長岡、飯山、金沢、彦根、名古屋、徳島、広島、福島および川辺などとなる。

よって九州に於ける真宗の分布の状況を寺院を指標として考えてみる。さきの論述⁴⁾につづいて、なるべく古い資料がよいと思われるので佐藤伝蔵山崎直方著『大日本地誌』第8巻のものを援用すると次表（表1）の如くである。

浄土及び真宗が全宗派の約60%を占めている。福岡、熊本は過半数以上で大分もそれに近い。絶対数は少ないが鹿児島は殆んどが真宗であり、宮崎もそれに次ぐ。この両県に寺院の非常に少ないことについては後でも触れるが、明治の排仏騒ぎで千以上もあった全寺院を廃棄した⁵⁾。思いきったことをしたもので、従ってこの僅かな寺院はその後の復興によるものである。その後半世紀を経て、鹿児島は倍増、宮崎も5割増となっている。（表2参

* 地理学研究室

表1 九州寺院分布表 (1908)

宗派 県	天台	真云	浄土	臨濟	曹洞	黄檗	真宗	日蓮	時宗	計
長崎	10	38	54	35	121	12	127	38	0	435
佐賀	49	65	91	176	258	29	279	67	0	1,014
福岡	60	59	320	120	153	49	821	58	5	1,645
熊本	18	37	87	23	137	6	678	62	0	1,048
大分	70	91	81	213	214	19	556	30	1	1,275
宮崎	4	16	12	10	63	0	74	12	2	193
鹿児島	1	1	4	2	9	0	119	1	1	138
	212	307	649	579	955	115	2654	268	9	5,748

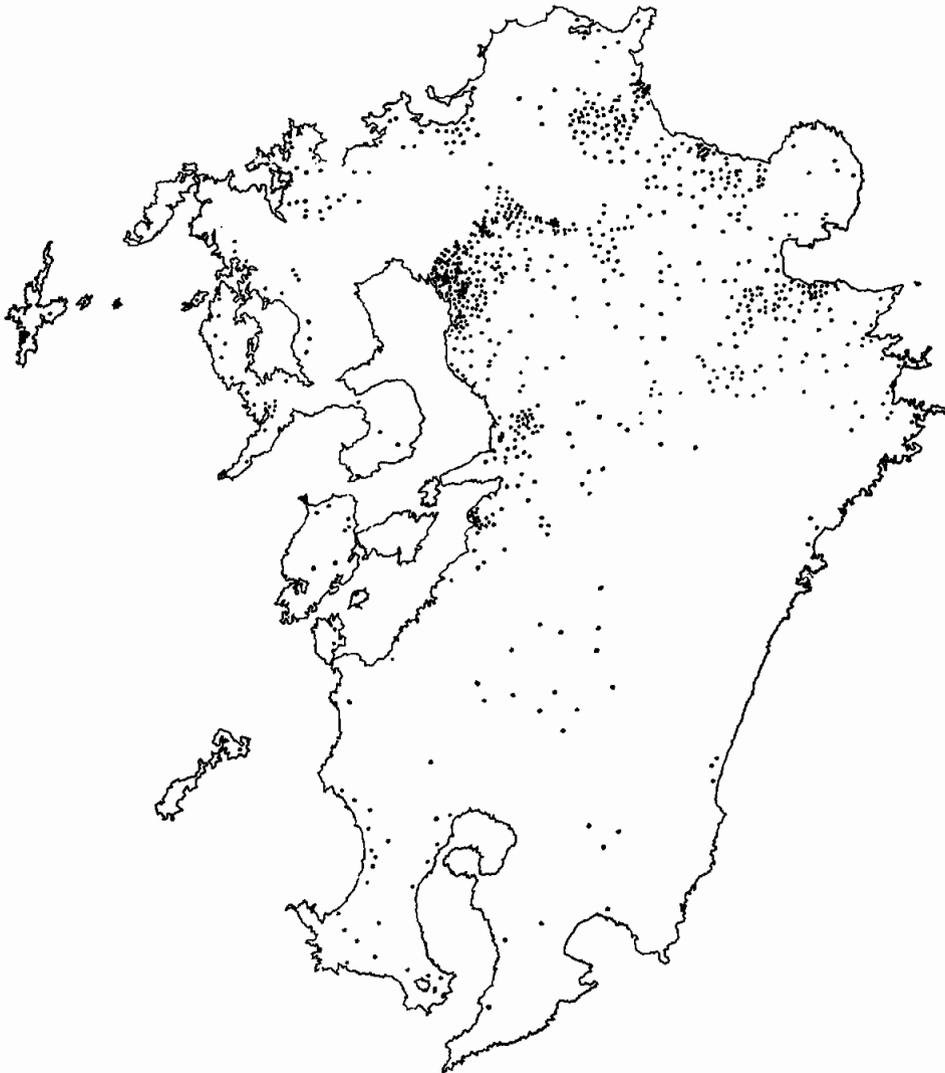


図1 真宗大谷派寺院分布図 (1947) ○ 1 寺

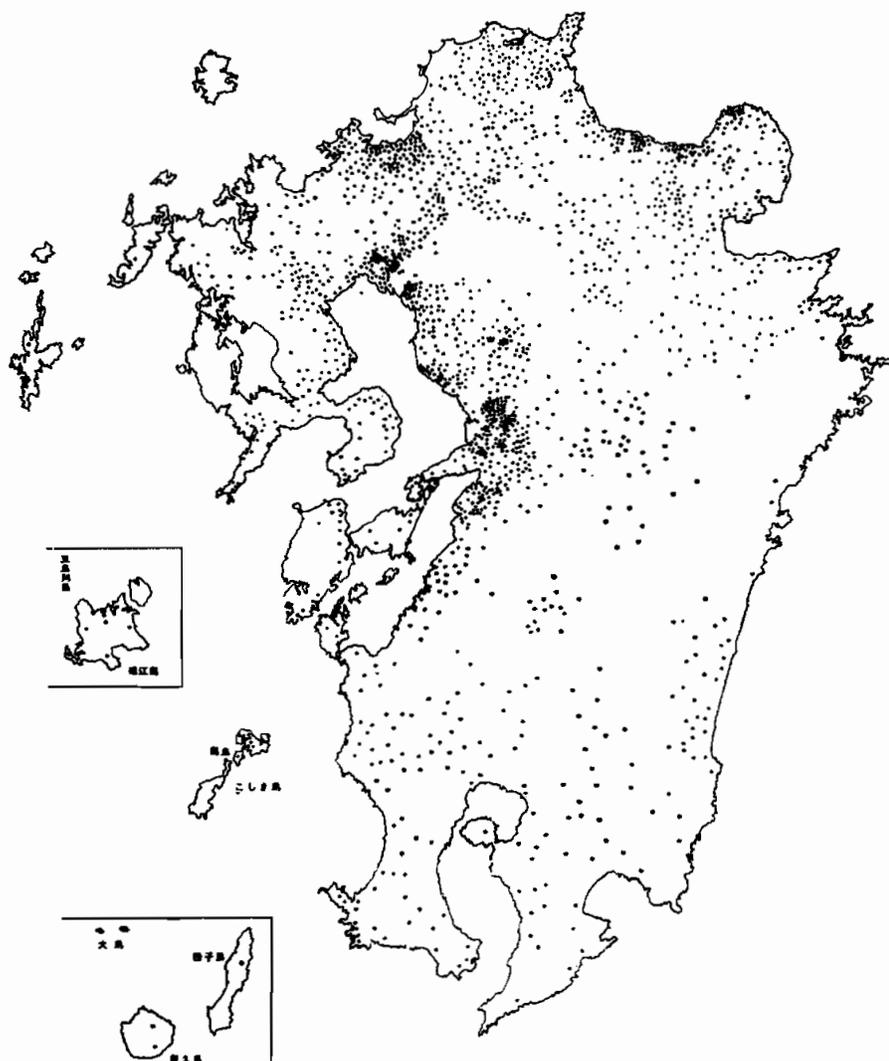


図2 浄土真宗本願寺派寺院分布図(1930)・1寺

照)。それが真宗であることに特に注意したい。九州は北陸に次ぐ真宗地域であるが、このような分布の由来についての地域的研究はなされていないようで⁶⁾、わたくしも今はそこまで手が及んでいない。

このように優位にある真宗について、この宗の2大宗派である本願寺派(西本願寺)と大谷派(東本願寺)の分布状況は前掲の図1図2の通りである。両図は昭和29年町村合併促進法以前の市町村界素図によって極めて厳密に寿栄松(現、浜田)慶子教育学士の協力を得て作成したものである。久しく篋底にあって、ひのめおがまずのものであったが、九州真宗寺院分布図として、これのみでも価値あるものとする。

両図を比較してちょっと注意深くみれば誰れしも気付くことは、福岡県と佐賀県即ち筑後川を境として截然と区切りのあることである。福岡県側に本願寺派の寺院がなく反対に佐賀県福岡県北部側には大谷派の寺院がみあたらない。さらに云うならば肥前の鍋島藩、筑前の福岡藩、同じく秋月藩の領内には大谷派寺院が無く反対に久留米藩(有馬氏)の領

内には本願寺派の寺院がみあたらずということである。

このうち大藩の有馬氏は元和6年(1620)有馬豊氏が福智山8万石より筑後8郡21万石の命を受け翌年久留米に入部したものである。2代日忠頼は寛永19年家督を継いで、寛永20年キリシタン禁教を厳重にして、上野・松崎・府中・草野・田主丸・吉井・羽犬塚・福島に支城をおいた。正保4年(1647)「如何なる理由か御領中本願寺西派をすべて東派に転派仰せさせ、転派をしない寺々は追院させられた⁷⁾」。本願寺派寺院追放により大谷派のみとなった。その理由は明らかになし得ないが、久保山千里『福島仏壇小史』では「有馬氏が東本願寺派の信者であったといわれる」としているが、この説は今も一部でいわれている⁸⁾。辻善之助『日本仏教史』巻3によると久留米藩有馬氏、柳河藩立花氏ともに禅宗大徳寺派であり、真宗は駿河田中藩本多氏、泉州伯太藩渡辺氏、江州水口藩加藤氏、同じく三上藩遠藤氏のみである。真宗はいずれも土豪的小藩主である。大藩主は内心はいざしらず真宗ではなかった。斯波義慧九州大谷短期大学長(福島の隣接地筑後市にある真宗大谷派設立の大学)によると、その昔藩主有馬氏が西本願寺門主に叱責されたのを怨んで全寺院を東本願寺派に転派せしめたのであると人びとは伝えているとしている。わたくしはこの説をとりたい。従って久留米藩に西本願寺派寺院がなく、筑後川を境として佐賀の鍋島藩(36万石)その分封諸藩(鹿島・小城・蓮池)及び筑前の福岡(黒田43万石)秋月(黒田5万石⁹⁾)には大谷派の寺院がみられない。本来このあたり一帯はその名の示す如く西本願寺の金城湯池であったのである。

3. 福島の始まり

表2 本願寺派寺院表¹⁰⁾

	本願寺派		大谷派	
	別院	寺院	別院	寺院
大分	1	302	1	222
福岡	1	568		385
佐賀		270		26
長崎		130	1	49
熊本	1	482		136
宮崎		91		19
鹿児島		165	1	79

福島仏壇の始まりは比較的新しいので明らかである¹¹⁾。文政4年(1821)宮野町の絵物職人であった遠渡三作が一夜荘厳美しい仏殿楼閣を夢みて制作を思い立ったのに始まると伝えている。同業の平井三作、井上利久平の協力を得て「御室仏壇」を完成したとある。御室仏壇という福島独自の名称を付しているが、「九州御室創始記念之碑」(撰者手島華川、題字大谷勝尊¹²⁾)には苦心惨憺創作、殿堂楼閣その彫刻禽鳥花卉の精細ことごとくを具え他産地へ影響をあたえたことを述べている。前述の『福島仏壇小史』ではこれをうけて京都でできていた仏壇をみていなかったとも思われるとしているが、真宗の勢力の強い

北九州地方では京都の本山詣りが盛んで、享和3年(1803)豊前小倉藩では「居宅之内に仏壇仕構候、所々様々之仏具等上方より調下候、以来右様之儀堅差留候」云々の布告を出しており、肥前の正司考棋は門徒の窮民でも本山に詣り、余裕のある者は大枚の金銀を出して「仏龕」を買求めて帰ることを伝えている¹³⁾。肥前は西本願寺派盛行地域の鍋島藩である。御室創始の数十年前の福島に隣接する地域の状況である。化政期は金箔も輝かしい京仏壇の盛行期であるが¹⁴⁾、夢にもみていたものを何かの機会に実際にみることを得たのであろう。一步ゆずって京ものをみていなくともモデルになるものが福島にはあった。彼の居住地は宮野町であったが、宮野町八幡宮では毎年秋の彼岸の中日に奉納される福島放生会福島灯籠があった。これは今も続く漆塗り箔押し入母屋造りの優雅な舞台である。かねがねこれを見ていた彼はこれを仏壇に應用せんとしたにちがいない。そしてまた藍胎漆器の

制作は久留米でお抱え塗師によって明和年間（一1772）50年も前に行なわれていた¹⁵⁾。技術も近くにあった。わたくしは福島仏壇は福島放生会のこの屋台に端を発するとみたい。

福島の業者はこれを以って九州に於ける仏壇制作の濫觴として「九州御室創始」を誇りとしている。事実九州の仏壇業者の多くはこの福島の業者のもとで修業を終えて帰郷の後創業しているか、福島人が移住してその業を広めたものである。殊に後述する川辺に福島は廂をかして母屋をとられた感じである。川辺のものは見場がよく小型で安いものを作るので本格派の福島がまけたと告白した業者もあった。

4. 産地の形成

創業者の系譜を記録にとどめておこう¹⁶⁾。

創始者

遠渡三作（天明6年—安政3年）宮野町住墓正福寺

千吉（三作襲名）

藤平（兄）

源次郎（弟）

貞蔵（長崎県に転出）

協力者

井上利久平（寛政6年—安政3年）京町住墓正福寺

清吉（弟）

忠五郎

清太郎

秀吉（提灯業に転業，子息薫）

平井三作（寛政6年—慶応3年）矢原町住墓同所

次平

宗吉

政記

原（辰也 税務署勤）

三作の御室創業20数年を経て嘉永前後，福島の盛行に応じて島津藩の鞘師や陣笠師などの

塗師が迎えられ塗職人の養成につとめたので仕上げの技術も向上して，幕末明治初年には産地が形成され精業（福島のみの特異な名称で仕上業のこと）18名を数えたという。

松鶴次吉・角庄平・川浄岩吉
・川並儀平・元村松次郎・遠渡千吉・倉富儀平・平木特次郎・高森万吉・大塚甚太郎・木下善次・井上清吉・古川伍平・中野吉蔵・佐藤平次郎・今村久太郎

の16名と蒲原の木佐木吉平，前



写真1. 八女市（福島）の景観（昭. 51）

古松町，入母屋妻入りの折り目正しい家が並んでいる。手前から3軒目仏壇や。



写真2. 八女市(福島)の景観(昭. 51)
仏壇やの多い西矢原町, 正面右, 老舗城後仏壇店.

従属的關係をもってつながり、ここに典型的な異種の工場手工業 (heterogeneous manufak-tur) の形迹をなしていたと久保山千里教授はみている。

5. その発展

荘厳美麗とは云うものの技術意匠ともに尚幼稚の域を脱せず堅牢な素材は用いてはいたが大部分はタテ塗(上塗で花塗, 溜塗ともいう)金箔は部分的に用いられていた。明治20年代に九州鉄道の開通によって市場は拡大されたが他産地の直接の影響を受けるようになった。明治37年五種組合が統合して「福島御室仏壇組合」を結成した。組合長城後儀次郎役員14名がいた。この組合設立に当っては八女郡長田中慶介の奔走があった。彼は在任期間10年に及びこの業界につくすこと大であった。「九州御室創始紀念之碑」を建設して業者の自覚と発奮を促した。また当時京都などのように純金箔に手の出なかった精業者が変色する中金箔洋金箔を使用して声価を落したので、精業組合を結成して組合が保証証を出すなどをして品位の向上につとめた。このことは昭和の初めまで続いた。

次頁の表3は各種の資料より寄せ集めたもので首尾一貫していない。最終は昭和51年5月10日現在「八女、福島仏壇仏具協同組合員名簿」による。製品は推定であるため内輪である。昭和

古賀の塚本与平あわせて18名である。この数は現在(昭和51)とあまり変わらない。産地形成は既にこの頃になされていたのである。

西南戦争も落着し地方殖産奨励が重視され、仏壇の総合工芸である特殊性からその分業化が進行して、明治15年頃には困(木地)・彫刻・宮殿・金具・精業の同業者が相寄って「五種組合」という小組合が成立した。精業に対して他は下請で、



写真3. 九州御室創始紀念之碑(昭. 51)
旧福島城址市役所裏の八女公園にある。緑泥片岩の巨大な自然石、当時の意気込みが思われる。

表3 業者の変遷

	精業	仏師	彫刻	囲	塗師	金具	宮殿	製品 (千円)	業者	従業員
明. 1	18									
明. 31								828 6,659		
明. 36	11									
明. 44	18	8	6	39	13	3		2145 25,300		
大. 10	15	1	6	8	8	1	3			
昭. 6									120	250
戦時中	9		1	3		3	1			
昭. 32	16		14	16			14	2600 82,000	77	250
昭. 40						15		1億50,000	98	225
昭. 51	28		12	12		17	15	15億00,000	78	133

6年頃が最盛期で製造区域は福島 of 3/1 に及び、町の西南部は業者で占有されていた。

(図3参照)

新興産地であるため京壇にその範を求めた。この点で彦根、飯山と同じ傾向をもつものである。明治30年代から末年にかけて塗師の松鶴曾祐、宮殿師の藤吉末吉、木地師の江上

次平などが京都の業者に入門して技術を身につけて帰福、福島壇の改良にそれぞれの部門で貢献した。金具の小山佐八、彫刻の山下善助、囲の国武又五郎、宮殿の塚本四郎、溝田浅吉などの名人といわれる人びとが輩出して声価をさらに高めた。その後も京都からの技術は連綿として導入され今日に及んでいる。従って一言にしていうならば遠渡三作が夢にみて以来の京都型仏壇で、特に東本願寺型が多いため黒漆塗を主体として過剰な彫刻もなく簡素できらびやかさが無い。その故に自からなる気品を備えている。

明治43年福岡市で開催された「九州沖縄八県聯合共進会」に出品入賞を皮切りに、大正3年久留米水天宮七百年記念博覧会、大正6年八女郡重要物産共進会、同14年熊本市主催国産共進会、同年大連勧業博覧会、大正15年大牟田市共進会、昭和2年福岡市主催東亜勧業博覧会、同3年

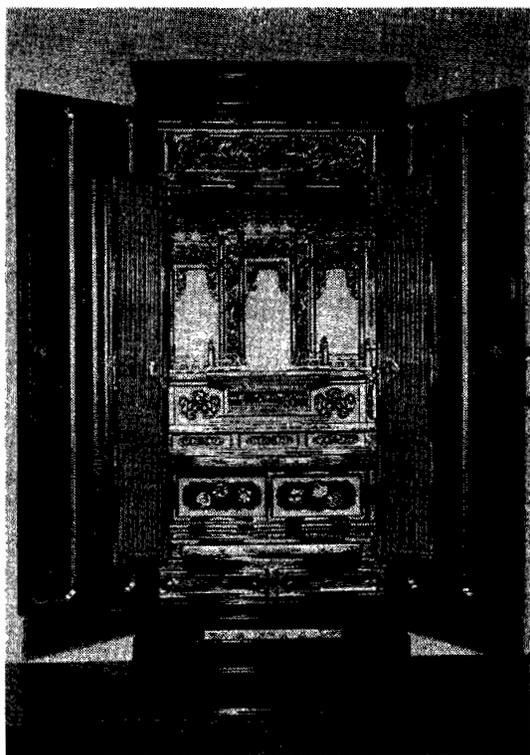


写真4. 西本願寺型 (50代一前幅60cm-) 外部に金具なく簡素、この特産の東本願寺型に近く京壇の趣きがある。井ノ口弥 昭和51年3月作

別府市主催中外勤業博覧会などに出品入賞を得ている。

九州に於ける特異な産業がここに形成発展してきたことを物語っている。

彼らの今に伝える誇りは昭和大典に福岡県献上の主基齊田早乙女舞八乙女舞台殿堂を制作したことである。生地は尾州桧及び原地の生材、塗は鮑塗（螺鈿の1種）板敷は砂子仕上、柱幕綱は純銀箔、内箱を原地桧、外箱を樅で制作した。城後儀次郎ほか70名より1400円近くを集めて費用にあてた。総合工芸の意気を遺憾なく発揮したものであるが、放生会屋台ともつながるものがあるのである。

その後福島工業試験所の技術者を招いて製図法の講習を開いたり、京都彦根名古屋などの先進地に視察員を派遣してモデルとなる宮殿彫刻金具それらの製作機械を購入して新技術の導入につとめた。

さらに福島より分れて産地形成している大川町、柳川町の製法を比較研究、資材の共同購入、規格（小型化）の制定、販路の開拓、金融の面など組合活動は活発であった。

昭和6年鹿児島商工会議所主催の国産振興博覧会に数十本を出品して入賞を得ている。明治以来の新興産地、かって福島が技術指導して今は大きくなりつつあった敵手川辺に殴り込みをかけたのである。この時代が福島の最盛期であったといわれている。

第2次大戦中戦死者を祀るという大義明分があるので金箔の特配があり、物品税も免除され技術者を多く戦場に送ったが、昭和18年工業組合法による「福岡県仏壇工業組合」が発足して主として配給のことに当たった。福島の城後好吉が会長に選ばれ九州地区連合会長にも推され、その事務所を福島においた。福島は九州の中心であるとともにわが国の代表地域にせりあがっていた。

この頃福島工業試験所で和紙木工の研究が行なわれていた。この西野弘技師は業界の発展に力をいたしたが鹿児島県木材工業試験場に転出して、ここでの経験を生かして川辺の産地形成に尽力することになる。このことは同試験場の技術部に受けつがれて今も熱のこもった指導が行なわれている。この面でも川辺は福島の恩恵をうけているのである。

昭和25年頃より32年頃にかけて需要は激増した。25年を100として昭和31年228.6に上昇した。それは農地改革による解放農民の抑圧されていた購入志向、陣没遺族への年金の交付によるものであるが、その後の高度成長にともなう農民の収入増、地価の高騰、新築家屋独立分家において、先祖のものは先祖に返えずといった考え方によって衰えをみせぬ需要がつづいている。

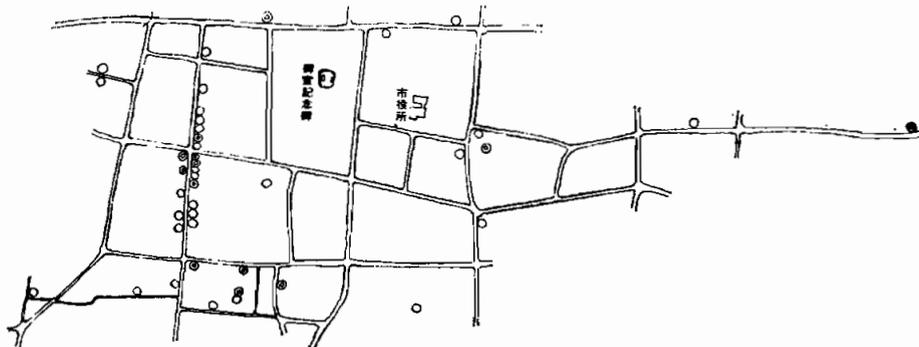


図3 大正末期福島本町仏壇業者分布図

●印 精業 ○印 彫刻・塗師・仏師・宮殿・金具
一城後好吉氏 (81才) の記憶により復原一

6. 現 況

しばしば述べたように総合的工芸であるのでどこでも、7～8種に分業化しているが、ここでは^{かたい}彫刻・^{はり}彫刻・^{くうでん}宮殿・金具の4種4業に分れ、精業というのがある、これは塗り箔押し組立（仕上げ）を行って、問屋的な性格をもつものである。

問 へら・ケヤキ・ホオ・カヤなどを用いて素地を作り上げる。前古賀、稲富、津之江に多く集まっている。

彫刻 へら、姫小松、土佐杉、米杉を使用する。これは各地に分散している。

宮殿 材料は彫刻と同じであるが前古賀に約半数が集住している。

金具 国武に最も多く各地に散在する。

精業 殆んどが福島に集住する。塗は前述の通りタテ塗で蠟色はない。木漆のみで、黒木町に蒔絵師がいる。

明治初年の精業者18名を列举しておいたので最近の状況を記録にとどめておきたい。

井ノ口 弥 (大正町)	城 後 好 吉 (矢原町)
宮 原 実 男 (")	鶴 祐 二 (")
近 松 久 雄 (清水町)	近 松 信 明 (京 町)
鶴 重 年 (")	野 口 朴 (宮野町)
近 松 源 弥 (古松町)	近 松 辰 雄 (新 町)
近 松 善 蔵 (")	篠 原 義 則 (紺屋町)
緒 方 隆 介 (矢原町)	井ノ口 是 (日ノ出町)

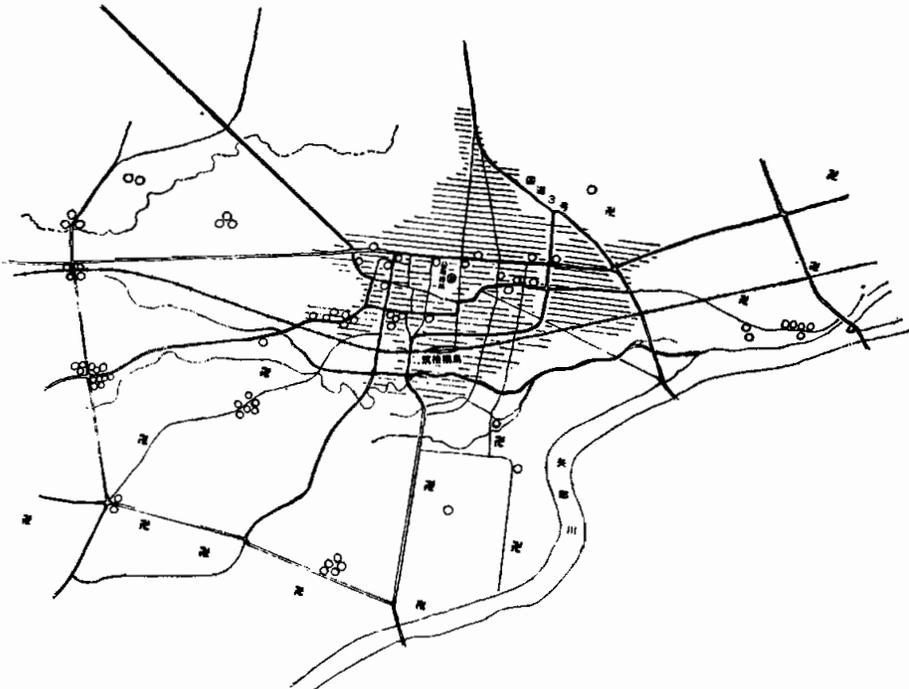


図4 八女、福島仏壇業者分布図(昭. 51. 3.)

—付納骨堂—

三 市街化地域 ○ 1業者 ㊦ 納骨堂

福島地区には精業が密集、周辺地域に分業者の集住の傾向がみられる。

牛島 益 男 (国 武)	緒 方 龍 介 (吉 田)
松 鶴 功 (北馬場)	°大 月 康 弘 (光)
熊 谷 光之助 (")	中 島 正 之 (亀甲)
木佐木 和 幸 (蒲 原)	°樋 口 勝 彦 (東唐人町)
馬 場 信 夫 (津之江)	°北 島 資 己 (")
福 山 治 明 (")	°溝 田 雅 之 (前古賀)
御 幡 豊 (室 岡)	°江 淵 信 義 (")
○印兼業 (例へば宮殿と)	(昭和51年9月15日現在)

商圏 (表4)

表4 商 圏

地 域	県 内	九州 (熊本, 大分, 長崎)	中国 (岡山まで)
名	73	21	6

労働 家族労働を主体とする。全事業所78のうち1人1業が56, 即ち71.8%に当る。10人以上は僅かに2で, これらは株式組織になっている。移入労働力はない。80才を越える現役者もいるが, 従業者の平均年齢は37~8才で伝統産業地にみられる老令化はない。これは若い専従者が中心となって需要幅湊期には適宜多数の臨時工に下請させるからである。灯籠などの同類の仕事があって潜在技術者がいるのである。このような点からも福島は仏壇のまちといえる。

7. そ の ほ か

福島仏壇の産地形成に当っては仏壇を本来の意義に於いて尊重するこの地域のもつ真宗の風土性がこの産業成立の第1条件であることは既に述べたが, なおこれに関して付加すべきものがある。

それはこの地域の各町まちにみられる納骨堂である。本来真宗では納骨はその本廟 (その本山の廟所, 開祖を葬る所) に納めるか, 「須弥壇収骨」と称して本山本堂の開山親鸞像を安置する須弥壇下に納めるのである。各自には墓がないのが立前で, 従って寺院には墓がない。ところが九州や東北のように「境関千里の雲をしのいで隴道萬程の日をおくって」(覚如報恩講式) 上落しなければならぬ所では, いつしかそれぞれの地域に納骨してもよいことになっている。筑後は尊墓の風の強い浄土宗や禅宗も卓越するので, ここに納骨堂の成立をみたのであらう。本堂は入母屋向拝付き瓦葺き, 本堂正面内陣に漆塗金箔の宮殿を備え, 周囲に納骨壇 (74個) をおくもので (八女郡立花町白木の場合) ある。これは真宗門徒にとっては本廟や本山を各々の地にもたらしたもので, 真宗の宗儀にもとるものでない。(図4参照) 従って各自の仏壇は仏を祀るところとなって, これも本来の意義を失っていないことになる。福島にはこの納骨堂や寺院向けの大規模仏具専門の精業者もある。

このような具体的な風土性もまた条件として考慮されねばならぬ。

そのほかにこの地方の地場産業とその職人風土といったようなものも大いにあると思える。

○八女石灯籠 近世初期に始まるもので, 阿蘇火山帯の八女市東部の長野地域の凝灰岩 (カマゼ石と地方では云う) を素材とするが, 寒さに強く熱にも耐えられ, 苔を生じやすく風雅な趣きがある。加工しやすく特産となっている。工賃が安く安価であることが好評

を呼んでいる。

○八女和紙 文禄年間（一1595）越前より導入されたもので、矢部川沿いの祈祷院や柳瀬に始まり楮を原料とする手すき紙であったが、障子紙（仏壇にも使用した）膏薬紙表紙として好評であった。最近では機械和紙であるが八女製造業の首位を占め九州和紙の拠点となっている。

○久留米がすり 久留米がすりは久留米市内の特産でなく、市の周辺一円ことに八女市や広川町が主産地であった。30回近い工程を経て織り上げられる手の込んだものである。

○福島灯籠 寛政10年（1798）の創業で盆用中陰用その他の用途に向けて九州最大の生産がある。昭和46年仕上問屋20、部品業者250年産200万個といわれている。分業化して8工程を経ていること仏壇と同巧異曲である。漆塗り蒔絵の台座の仕法は仏壇と共通するものがある。仏壇業者がこれに転じたものもある。

以上の伝統工芸はいづれも低賃銀単純労働悪環境経営組織の前近代性のもとにあった。人もしこの地で働かんとするならば、これらの仕事のほかに何があったか。生活を支えるために他に選択の余地はなかった。そして唯れもが似たような仕事に従い自分独りでないという気やすめみたいなのがあった。ここにはそんな職人的風土のようなものがあった。明治以来昭和の初めまで福島仏壇の中心として活躍した城後儀次郎の後を継ぎ、倦むことなく今なお塗りを続けている好吉翁（81才）のこの言葉には人をして頷かせしめるものがある。

○福島放生会屋台（福島灯籠人形） 毎年秋彼岸中日に八幡神社放生会に奉納されるもので、高さ8m、巾14m、奥行6m2階建入母屋造りで金銀箔漆塗りの華麗なものである。この舞台であやつられる人形劇は民俗芸能として県指定無形文化財である。宝暦11年（1761）に始まるというが次第に豪華になり1本の釘も鋸も使わず自由に組立て取こわしができるようにになっている。あやつり人形のからくりとともに相当な木工技術である。この技術が仏壇に反映しており、前述の大典の八乙女舞台殿堂もこれの垂流であり、その昔、三作もこれからイメージを得たものであろう。

8. ま と め

福島は水繩・筑肥両山地の間を流れ出る矢部川の谷口集落で八女地方の中心部市である。自から古くより城下町として栄えた。石橋正良博士の元禄1年（1688）福島町古図の研究によれば、大友、筑紫、田中各氏の城下町の跡をとどめ、有馬氏の支城として3重の堀を有し、町の南部外堀と内堀の間を紺屋町京町古松町矢原町などの街道が鍵状に通じ、内堀に沿ってかつての城主創建の寺院ならぶ典型的な城下町であった。消費地の城下町八女平野の中心都市福島は弦歌さんざめく土地であった。今でも全商店中21%は飲食関係である。中心都市福島に地域の真宗という風土性にささえられて、放生会舞台にみられる古くからの指物技術、灯燈、和紙の関連工芸、根を必要とするかすり、石灯籠などの職人的風土に根ざして、ここに福島のお仏壇が発生し成長したものである。

9. 川 辺 仏 壇

薩摩半島の中央に人知れずひっそり息づいているような川辺の町がある。数百mの山地にかこまれている面積128m²の盆地で、そこに2万あまりの人口とが住みついている。

寿永4年（1185）亡びた平氏の残党がここにも逃がれてきた。平直房がこのあたりに勢力を延ばして河辺氏を号していたからである。彼らは清水川に沿って磨崖仏層塔宝篋印塔

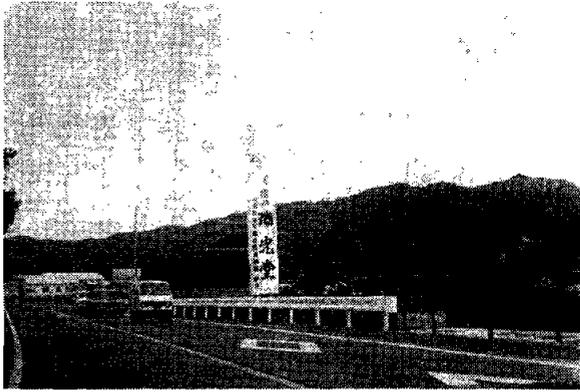


写真5. 川辺町国道225号沿, 街はづれの景観(昭. 51)
この道に沿う中心街には新しい店舗が店開きしている。

位の重要産業の仏壇である。鹿児島から国道 225 号線で34K南下すると、緑の山並みの沿道に仏壇の広告塔が左右にポッキリと現われる。あたりにはほかに何もものない。そんな静かな町にたどり着いて近代化されている街並に驚く。豊かな新しい町である。

表5 出荷事業所

出荷額	事業所	従業員
32 億円	195	970

昭和51年3月共同組合ききとり

を刻みその菩提を弔った。河辺氏の菩提寺宝光院には延元1年(1336)在銘の漆塗りの位牌も現存する。河辺氏は承久の乱(1221)後、おとろえ弘和2年(1382)島津領となった。その後島津氏の三州統一(慶長1年)まで紛争が続いたが、以後平和裡に明治維新を迎えた¹⁷⁾。

このような宗教的雰囲気のある所に下表(表5)にみるような出荷のある事業がある。鹿児島県伝統工業では袖に次ぐ第2

10. その背景

さきの表(表1)でも明らかであるように鹿児島宮崎の真宗寺院はその数は甚だ少ないが全寺院中88%を占める。鹿児島は真宗の独占地域である。ところが世にも知られているように、島津藩政を通じて明治維新まで薩摩日向大隅は真宗禁教地域であった。必要な範囲内において、その概要を龍谷大学編『カヤカベーかくれ念仏』などと、現地ききとりによって紹介する¹⁸⁾。薩藩の真宗禁教は全時代を通じて永く踏襲されたもので他に類例をみない。直接本願寺と対立抗争するのではなく、それは大義明分が通らないので一方的に領民へ重圧を加えていたのである。禁教は島津忠良(貴久の父)の時代からであるが、江戸期後半が一層激化した。ミダー仏の前には絶対平等を説く真宗の教義は反封建的で、封建支配に対する反逆的性格とみた。寛文の宗門改め寺請制度によって真宗も幕府権力に奉仕することによって幕府も安堵したのである。薩摩はそれを許さなかった。島津一門の強力な独裁体制にひびが入るからである。

禁教下の民衆は火山灰(シラス)地域の窮乏した経済にもかかわらず、本願寺宗徒は本山へは借げもなく納金し本尊、和讃などを下附してもらい、剃髪を受け講の費用を出した。1村または数村の信徒が講をもち、本尊である「御座仏」を番役が給仕して、秘密裡に信仰を持続した。弾圧されて信仰は熾烈となった。天保14年(1843)70余講が露見し14万人の門徒が摘発されたことは、天保の法難崩れとして知られている。そこで信徒は何とかして藩の追求をのがれんとし画策したのがいわゆる「かくれ念仏」である。本尊は時に3寸~4寸(10cm)の小幅のものを下附してもらい、平素は「傘」「俎板」「萱壁」などにかくしておいた。壁の中に塗り込めてその場をおかむものもあった。

シラス地域であるので洞穴(横穴)が掘り易いためそこに作物や薪を貯蔵していたが、これにヒントを得たのに「念仏がま」がある。入口を小さくして通路(1例76cm)をわざわざ曲げて、内部は畳1~2枚しける広さで(高さ1例102cm)そこに本尊をかくして、

2～3名交代で礼拝していた。

また真宗を霧島神宮崇拝に仮装したものもある。霧島はアマミダの垂跡と考え、教義は口伝で参詣にも沈黙を守り異教徒を入れず、「神は九善王は十善同行は五十一善善知識は七十五善」信者は神や王より上位である。上下差別の極端な薩摩で、この言葉は人びとを引きつけた。彼らの心底には念仏行者を最上善とする意識があったのである。

弾圧の薩政は終わったが、次に三州に排仏毀釈の暴しが吹き荒れた。明治2年1,066の寺院は廃絶、僧2964人を還俗せしめた。しかし真宗門徒は村をあげて講を結び決死の僧は法談説教を試み、遂に9年9月県をして宗旨自由の布告を出さしめた。東本願寺は渥美契誠を団長とする遊説隊を送り込んだ。10年、西南戦争が起り、政府はこの勇敢な東本願寺に民情鎮撫を命じてきた。派遣団は薩軍にとりかこまれ殉難者を出した。8月鹿児島に別院を設け教線を広げた¹⁹⁾。現在の鹿児島県寺院80宮崎県19にまで発展した。これらの大弾圧を受けても南九州の真宗教徒は僧俗ともに燎原の火の如く信火を燃しつづけた。これが川辺仏壇盛行の第1の理由である。抑圧されたものの復活への歓びとして、礼拝の場をいち早く求めたのである。

11. その起源

禁教のもとで魚籃の内側に金箔を押ししたり単筒仏壇を作ったりしていたのでもわかるように、その技術はあった。殊に武辺のお国柄鞘師陣笠師の塗は前述の如く福島仏壇に寄与したことがあるように、彼らのある者は洞穴に安置できる極めて小型のものを制作していたかも知れない。

今日の川辺仏壇は明治9年の解禁以後、たまたま川辺の池田なる者がガマ型の小型ものを制作したのに始まると伝えている。川辺共同高等職業訓練校にその初期の高さ約50cmのものが展示されている。池田に子孫なくその技術は伝えられて大発展したが、彼の系譜は尋ねる由も無く総て忘れ去られている。

何故この薩南の山中にこの業が立地したか杳として明らかでない。

しかしすでに今次の大戦前に次の業者が成立していた。

中島 馨 久保一男 蘭田福次 上野一二 中堂蘭矢吉 原田金之助
辰野吉太郎 福元一夫 木場田鉄次



写真6. 鹿児島県川辺仏壇協同組合
川辺共同高等職業訓練校(昭. 51)
仰々しくないとこがよい。

以上9名の組立^{ぬし}である。

九州での先進地福島に徒弟を入門せしめてその技術を導入し、このことは昭和30年代まで続いた。一方直接京都からの技術導入も行なわれ、苦い技術者は京都での修行に強くあこがれている。さきにも触れておいたように福島で仏壇指導の経験のあった福島工業試験所の西野弘技師が鹿児島県木材工業試験所に転出して技術指導したことは川辺にとって幸いなことであった。

12. 現 況

福島では5種に分化しているが、ここでは他の産地同様8職に分業している。

木地 県内産のスギ、ヒバ、ホオノキを用い乾燥度15%以下とする。後の作業を容易ならしめるため分解結合できるようにする。固定部分はほぞ組である。

宮殿 材料は木地と同じであるが斗拱は分解結合できるように竹串でとめる。

彫刻 マツ、スギ、ヒバ、ホオノキを用いる。仕上は手加工で接着剤竹串で補強する。

金具 銅または銅合金を主として手加工による。宗教用具のほか民芸装飾家具など各種のものが大量に生産されるようになった。九州での中心地を形成しつつある。

塗装 膠と胡粉の下地寒冷紗麻布和紙で布着せする。漆は天然精製品を用いるが上塗仕上げである。普及品は布着せなくカシューも塗布する。

箔押 純金箔細部は金箔片金粉を使用する。

蒔絵 純金粉精製漆を使用し青貝は天然のもの。手描きで高蒔絵もある。構図を作成して下絵をかき粉蒔き上絵描き粉蒔き研き出して完成する。

組立 品格あるように金具を打ち、中道具を正確に組立て障子抽斗など調子よく良質の椿油で拭き立てを入念にする。総体的に品位を備えているようにする。

12. そのほか

技術は九州での先進地福島にこれを得たことは既に述べた。安価で豊富な材料を入手することができ、低廉な賃銀に甘んじ、より質素な生活に耐えうる勤勉な労働力を多くもっている。事実わたくしの調査に協力していただいた20代の技術者は中学卒業後直ちにこの業に入り、京都などの先進地を訪ねることを唯一の楽しみとしている根っからの専門家で、下地は年輪のない指宿の黄楊に限ると教えてくれた。

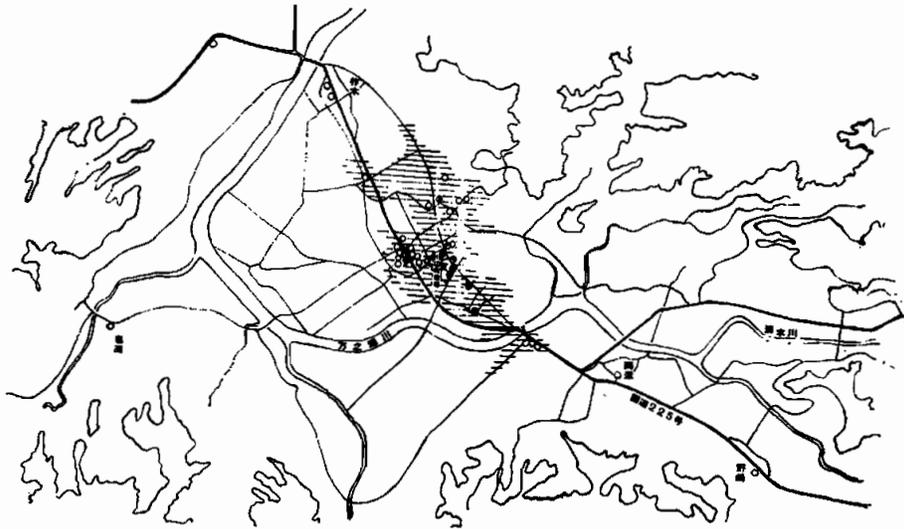


図5 川辺組立(ぬし)分布図(昭. 51. 3.)

≡ 市街化地域 ● 戦前よりのもの ○ 戦後のもの / 100mコンター

昭和50年5月伝統的工芸品産業としての指定を受け、伝統工芸士認定制度を実施しようとして頗る意欲的である。従業者に社会的評価を与え伝統技術の維持向上と技術修得への意欲増進をねらっている。地位の向上は後継者の確保につながると考えている。実務経験20年以上の者に実技と知識の検定をするものである。わたくしの調査の時点では準備の段階であったが、指導者も人びとも発刺として自己の業務に誇りと自信ともっているようであった。職場と店舗も新しいものが多く、緋鯉の泳ぐ池もあって明るく近代的で、伝統産業地域にみられる暗さがなかった。川辺音頭で「細工は粒々お化粧は見事 婿は八人 メリケンまでも 嬉したよりの 引くてあまたの お仏だん」として風景と農産を歌い唯一の工芸生産の仏壇に将来を賭けているようである。

過疎の町で昭和25年以来人口の減少を続け48年以来やや落ついている。しかし注意すべきは世帯は25年以来殆んど変化なく5千数百戸が定着している。この5千戸が現状維持、ここでの生活可能な限界と思われる。これではならぬ、この限界を抜き出さるための飛躍を考えている。現在全国シェア10%であるが、これを60%にしたいと大きな夢をいだいている。

13. ま と め

仏壇の本体を台の上におくようになっている小型の前幅60cm以下のものを「ガマ戸」といって、ここの特産である。名古屋城のように二段分離式である。名古屋型が水害避難緊急持ち運び型とわたくしはみたが²⁰⁾、ここでは本尊のみを安置するガマ戸型の小型仏壇から発展したものである。それは薩摩禁教の歴史を秘めているもので、この特殊性はあくまで残しておきたい。これに向えば連続としてつづいた苦難の歴史をともしうるからである。しかしこれとは関係なしに、核家族化などの生活様式の変化で小型のものが歓迎されて、川辺ものが全国的に要求されているのである。もっとも大型のものもできるようになり、唐木仏壇は金箔の部分が少なく暗い感じがあり金仏壇は取扱が面倒である。そこで近頃のインテリアに対応して囲を唐木にして内部金箔の新型を試みている。進取の傾向である。川辺共同高等職業訓練校卒業の若い人が育ち、独身技術者の近代的な寮舎もある。定期的に仏教講話（真宗）を開いて、仕事に対する自信と誇りとを与えている。物心両面からの新しい職業人の養成である。

2月の2～3日は例年の仏壇まつりで、1種のコンクールであり各種の催しものもあって、それが生産向上につながっている。

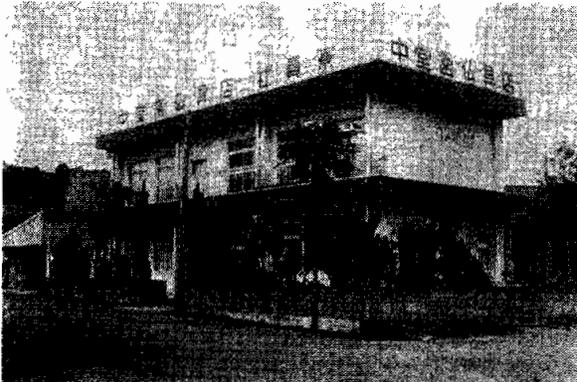


写真7. 川辺町業者の社員寮(昭. 51)
ここには伝統工芸にありがちな暗さが感ぜられない。

僻遠地、過疎地の運命をまともに受けとめてそれを回避することなく人びとが共にこれが唯一の生業として迷うことなく精進している薩摩隼人の後裔の心意気にこの工芸の発展があった。

まことに川辺はわが国に於ける最も珍らしい古くて新しい業の專業工芸の新興都市である。

あ と が き

久留米明星中学校教諭豊田光子，八女市商工観光課長井上正人，八女，福島仏壇仏具協同組合長井ノ口弥，城後好吉，石橋正良博士，川辺仏壇協同組合，川辺町総務課企画調整係長牧角襄，中堂蘭福丸，同じく安丸の諸氏から昭和51年3月初めの現地調査やその後の補充調査で，大谷大学講師高橋正隆，奈良大学助教授市川良哉の両先生からは真宗史に関する文献で，また奈良大学教授辻田右左男先生からも，それぞれ心からなる御支援と御教示をいただいた。殊に現地では忘れ得ぬ思い出となっている。心から御礼を申しあげておきたい。

叙述がルポルタージュ風となったが，なにしろ小規模な家族的工芸であるので，数字的なまとまったデータがえられなかった。無理もない。記録のために彼らは仕事はしていなかった。わたくしは仕事の妨害者であったことをお詫びするのみである。

(昭和51年秋彼岸福島放生会の日稿了)

注

1. 内田秀雄『日本の宗教的風土と国土観』(昭. 46)『奈良大学紀要』3 (昭. 49)
2. 市勢要覧『八女』(1971).
昭和29年町村合併促進法が成立して各地に新しい市町村が成立した。古い歴史を有する八女郡(八女平野)の中心福島は新しい市の中心として筑後福島と称せらるべきであった。ところが隣接地羽犬塚がこの名をきらっていち早く筑後市を名乗った。そこで福島はオーダーのちがう郡名の「八女」を名乗らざるを得なかった。古い伝統は棄て難く「八女(福島)」などえ体の知れぬ表識が行なわれている。八女市に馴染めなく「八女，福島仏壇仏具協同組合」と称している。
3. 町勢要覧『かわなべ』(1975).
4. 内田秀雄『奈良大学紀要』3 (昭. 49).
5. 松本専成「真宗大谷派近代のあゆみ」、『真宗』770号(昭. 43) p. 52.
6. 仏教史学会編『日本仏教の地域発展』(昭. 36)九州が欠けている。
7. 福岡県編『福岡県史』第3巻の1。(昭. 40) p. 12.
8. 八女市役所商工観光課長井上正人。
9. 大名配置は寛文4年(1664)のもの，幕末まで変化がなかった。
10. 真宗大谷派宗務所『寺院教会名簿』(昭. 40)。浄土真宗本願寺派宗務所『寺院名簿』(昭. 47).
11. 福島仏壇共同組合『福島仏壇の起源』(稿本，昭. 6)
八女市編『福島仏壇小史』(昭. 40)歴史的記述は本書による所が多い。
12. 大谷勝尊東本願寺第21代嚴如の息，明治中薬本願寺両堂再建事務局管理として活躍した。(『大谷派近代年表』。(大. 13)
13. 新城常三『社寺参詣の社会経済史的研究』(昭. 39) p. 876以下。
14. 内田秀雄前掲著書 p. 135. 沢口悟一『日本漆工の研究』(昭. 41) p. 111.
15. 市勢要覧『八女』(1971)その他ききとりによる。
16. 福島仏壇共同組合『福島仏壇の起源』(前掲)。城後好吉翁(81才)による。
17. 町勢要覧『かわなべ』(1975).
18. 竜谷大学宗教調査班編(昭. 45) p. 215 以下。工藤鶯岳「薩摩法難記」『妙好人めぐり』第6集(昭. 40)
19. 松本専成「真宗大谷派近代のあゆみ」、『真宗』770号(昭. 43) p. 53.
20. 内田秀雄『日本の宗教的風土と国土観』(昭. 46) p. 148.

Summary

I have already shown the status of Buddhist's home worship altar industry in our country in my former papers. This time I surveyed the same industry in Kyushu, especially of Fukushima in Northern and of Kawanabe in South-Kyushu.

In Kyushu there are seen so many Shin-shu believers next to Hokuriku. It is obvious that in this Sect man ought to have a gorgeous golden lacquer altar, by which he worships Ami-tabha, not his ancestors like other Sect does. Therefore they hoped to have such golden altars from old time, but previously these altars were made only in Kyoto and its environs like Hikone or Nagoya, and nowhere in Kyushu. Accordingly those pious believers could not satisfy their desires of having such altars for a long time. But at the beginning of 19th century at Fukushima appeared for the first time the primitive Buddhist altar made by Towatari Sansaku, and thereafter this manufacturing gradually developed here. Now Fukushima has become the manufacturing center of this industry.

In Kagoshima and Miyazaki prefectures of Southern Kyushu, Shin-shu Sect had been prohibited by the Feudal Land Lord Shimazu, and the believers were obliged to keep their faith secretly. But as soon as the Meiji Era began, the freedom of belief was declared by the New Government and believers bought altars contentiously. Thus the manufacturing of altars started here in Kawanabe under the technical guidances of workers of Fukushima at the middle period of Meiji Era. At present Kawanabe has become one of the manufacturing center of this industry in Japan. The characteristics of Kawanabe's products are to make the small sized, cheaper but more beautiful altars than any other products in Japan. Kawanabe is situated very far from the main producing areas in the middle part of Japan, and this is the chief reason of rapid development and also of prosperity of this industry.